

交羅衣 式篇

79

利 9
3869
29



一
家
羅
衣
武
篇

利 9
3869
29

利 9
3869
卷 29

良山道
草川
河
仲
吾
色
新
古
大
五
日
長
仕
升
之
玉
立

大正七年三月廿四日
宣平

序

永羅衣乃
題号
氣ハ
橋狀
なる
是
清
ま
か
き
川
を
も
つ
能
色
子
た
の
ま
ま
の
江
を
も
つ
為
善
人
古
の
法
雅
乃
花
の
法
君子
入
吟
我
催
促
と
は
漸

心
生
心
心
心

利 9
3869
卷 29

序

永羅衣乃魁号
たろ走馬
子
考
天子
天子

大正七年三月
室井平藏

二篇と存なり又初篇と載
るる米をきくは日等以後居
るを移る増減河に子く彫刻
を攻高流子備人のと

天保六
未秋

丹頂齋一書



歌羅夜二篇



折句題 ヤナキ

心痛く長く下り裁玉の荷
美若きや啼く響も若き
宿のあそびを指鼻ては日暮
瘦くく形も年もよるあそ
休むる輪連急う子極る旅
流く勢を妻と切る氣も肉増

松花 寛坊 珠交 十瓶 龜石 谷泉

美入りの内籠と色も極る縁

孟洗

日三升

水梅子目のとらるる綱十綱

サ好

糸をの世そのい戸尾うる款

龜山

見舞子とくと審子居積う

美園

糸を隅田と取うる川上

閑瀧

尺削きぬ若る色く積る子

如水

冠り鉄花

花架子や大師一人の出る筆

柏枝

花も芝居と連の気も形も花

一鉄器

花を裏子座も文うる花器子

一瓢

花をあうとる桜井子上野若

東我

花の重譜は又も珍は切

夢中

花抽子のうしほと下戸も定教

柳

花豆袋をにく指し海老の門

枕却

花の傘日の廻文も捻ッ子

路蝶

花ハ字もまね積る子も実う今

一亀楽

花の葉を裏もおまをちるぬ気

一泉

山

山がら子腹もゆるり
山下のよき花音吹
山彦の根もつるき
山吹の継花嫁の気
山中の家納戸子
山水の袖摺き
山下のお杉見る子も玉細

賀重
花芽
亀甲
松莪
材居
五来
三蝶

杉並歌 笑和

梅笑よとよ和尚も
笑ひ顔嫁和らに
酒も和ら笑ひ顔も
五字題 存の外

夕キ
田張
柳水

淡義も上もな和
きこちあけりて
箱へ這入る金銭
一句出たのも考
かゝる夏の花

小尾
吹多樓
毒者
洞江
同入

西人部 花又ハ居る

春定

日大入り

むせうにむせう 穂舌はら出来
おいんのかねく 道中を初
引く色きき 清い声多
ハケ舟の宵ハ 清い人々
蜆汁ハ一産を押し上り

二刀

ハ鬼

木丸

生蝶

大甘

大和巡りの支度

すく梅心笑

玉住

折句疑 ムニタ

娘と妻の形ろく 妻のろく 雛
多買の籠麻路路の 籠も船
娘も襦をろくろく 豊登
室町ハ又買ものも 籠支度
無理子独口 豊登子
娘ハ慢張 籠支度
向ハ一者ハ 籠支度
馬法をく 籠支度

孟法

本坊

東我

谷泉

一橋

一泉

園入

夕キ

女丈留まておんらの玉三風信

三蝶

日サカ

山椒魚買ふやうな名も四の名

竹多橋

三味線杖よ桐の催促

花芳

振今年ハ仮種の新

一瓢

三曲ノ福々柳やの見世

二刀

里々嫁を飾る雛の意

サ好

冠歌道

花中を一日玉留よえま外

花芳

及身自持子風を四國様

龜乐

及もたらけぬ子の儀假名暗簾

珠交

日草

その如く踊りの教も七ッ八ッ

赤丸

その履着する子程古歌三河町

龜石

その正日もほつらうと甲子の種

亀甲

その列の種をかめらるれ其の根

五来

その芽や青く温泉場も豊崎

賀重

お込歌 日生

お土産の生薬目録の坊之
鉄粉 麻 妻生油 目録 麻

花芳 魯述

五字歌 こんざり

舌の巴々ぬ子供が藤の
鳥毛の二本子三指と居り
出舟へといさう碇をおろさ
ま 國橋を渡りし掛り
扇の上へ一子把はらさ

ハ鬼 月岡 本丸 柏枝 松花

何安ん

一ツ所子ありて親を托し
追ッまゝく戸をお付て是キ
貫つる婦子仮り宅を見せ
腋のいさむ虫の根を切り
出ろと早く降ッく巻やし
向ふ風をいさ

柳 和調 田張 袂家 實坊

襦を巻くさま

玉住

折句歌 カタク

縫備りて折くを讀み双紙

赤巻

鏡も豆田植の妻へ来ル乳香
落る洗濯気力ある雲紋り
かしく半巻お茶もひききり
燈もつと抱く舟底垢も窮き膝
髪も目出反洗濯子の苦身咽
掛針も髪をまとまきるくけは舞
髪はよ盃あゝ園の松浮く
傘の幅を出入おの跡の釘妻
松魚り来ると皿を出て喰ひま揚

夕 / キ
旭 二
亀 石
谷 泉
本 丸
松 花
亀 甲
盃 洗
賀 重

日向

甘茶汲む子の柄杓筆
青梅の仕る名せたる言を百
欠ひのうらみのるる廊の側
聖人の芝居を目も水く待
引くもうらう目も舞子むせて袖
引伸よ嫁まゝを物を吹くひて
引掛と裾の子猫の鈴の音

泰 窓
園 松
樹 鶴
一 瓢
一 泉
一 江
福 定

冠 冠 引

引くくやえくまよといふ井戸の綱
引出くも望く娘んと妻の口
引室の日向へ妻の出は子猫
引くくく来たる巻袴の袖は邪

日 物

物手子母子に孫ぞる風の糸
物をも蝶子妻呵邪邪子猫
物籠りも一ツをいふを扱仕舞
物毛もさ子の歌様子曲つ根
物も席耳草茶玉子下る花

折込歌 浮廻

おひくくと浮く根色くの松の裾
経る廻廊浮雲くも母附く
油もこも甲う浮きの出ぬ子妻
和因も剣浮き少路くも道
系名所を等もくも浮き捨師

五字歌 奇女

思ふく以る目玉をつへ出

田張
枝下
来賀
如魚

東我
魯遊
花芽
ハ鬼
毒丸

三燦
十瓶
雨柳
龜山
吟多楼

圓入

海防の旨く甘菜を汲ませ
遠き路へかけ付く
其菜を土より掘り来
其の者より尋ねを教は

曰 大丈夫

法がまゝのやうなまゝせしむるは
二代目も烏帽子をきくは
教を子路院を焚火で焼く
縁々に幸ひに見ゆるは

怖い夢ごと

森 返りをくも

折句歌 テウハ

子本とつらう有る言は
城も乃連水子のあはく白路
照るも能く積着は了 剥き烏芋
出るも子妻の孫へ煙
出番お園に頼町へ近し船
出代りや妻の世話く結ひ誓

鉄骨
龜乐
小尾
柏枝

二刀
龜臺
五束
生煤

玉任

龜甲
極却
松死
魯遊
賀重
國松

田畑も他り高きく村草居
手を引く妻も即ちむぢある
手ぢりしと妻もよれ虫討し

曰カク

形くく音踏まふ物酒の詫
風よ柳く秘言古所のみ
和魚と聲も言ひ音屋
片身ハ小串鯛の丈四
隠は梅干糸の子の皮
かさば扇も賢く言の妻

冠疑 初

初物も人走き妻の口奢り
初穂程もよ白粉の庵水
初和魚初柳もよ花内堂
初物も甚のがら烏帽子魚
初物の若もよ小粒の口高

曰音

音を入るお持もや余の音

十

ハ鬼
柏枝
毒常

東我
龜石
樹雀
未賀
井原
一泉

一賀
龜山
福定
園彌
田張
五未

音も五ッぢアアノ母の物勅め
音也々々ノ押ノ杖文のノ形ぶ
音止マるほのら土籠ノ考之立湯
音もかろと基も酒ノ器ノ座

一 瓢
國 松
谷 泉
本 丸

音も振る境もあけさる吞振白
音早振札るの句々張る柱
音の振るえて向垂れ在り形
音向ひて音を振る子の髪小ぢ丸
音ノ座へ貸入る入も振て可也

三 蝶
圓 入
寛 坊
二 刀
盃 洗

五字歌 大笑

卒初笑を之越れ冬瓜を仕置
於名換く音ノ子好座を納りせ

龜 采
鉄 冪

日 通

音素路の旅々々々歩あり
喰りてこのも小呂物々をのせ
大鼓の皮成庵丁で庵り
踊り子も夜モをるをまら

吟 多 楼
春 定
生 蝶
洞 江

懐紙のきり揃いを福しり

夕キ

垢掃も飛ぶ

美昏のやうな

玉住

お白紙 ハス

丹の髪梳きもちよひのう 稽古の留

垢二

摺留涼しく吹切の糸の牙へ

圓入

針糸の角こよ子持の一本銀

一泉

たつた子好く座敷のきに出て

一國松

削るむき墨まき摺ねいろまき

一本葉

飛蟻掃拵 石張りのいし

一本坊

撥と世より透るぬ巻の稽古の師

谷泉

垢も落し髪も休む糸や岩あふ

一瓢

刷毛目も落く妻糊も化粧を

毒丸

同 キウハ

移り移るまきく 番新の物

未架

ほめ丸のあしをさむ振袖

未丸

雛を掃むもて摺の羽うけ

五来

浮せる猪りも垢はうの妻

十瓶

冠う歌 水

水も直者も張順死飽取
水も洩らさるゝ海防處の女夫連
水も来て結も成現くはる
水の鏡や雪うにさるゝも十三三
水際つまっく新河へ凍舟
水盤を好く子あへるさ付る

日色

を気より喰けとまむく豆藝者
を守たけあり人の好く様子
を小錦もも防風の袴四
を型人以老松法を確は出老
を揚の羽織かへる色せり子
を七層森好く子の気性との

お込冠 青分

取うふれ小四胡血も青強勢
ふり以國ふもま楼も青も高し
右ッ筆に青然刀へ子分の名

賀重

三 棟

龜 山

毒 丸

二 刀

柏 枝

龜 甲

田 張

春 定

柏 花

ハ 鬼

盃 洗

魯 抱

龜 石

寛 坊

五字歌 ほん

石中一石くを取て返く
船極りのきき存首を落し
四角に月う、壁あくさく一込

日さひの終

系くくはくをえせく回く
是の附く見為く語く
程久指く切つて回く
月録も出て病く驚く終く

危何や二トその

多き舟の正

折句題 けらヒ

急く用おつくよま立つ緒小糸
お狂言の奥く写りもむきて妻
意地つくるお清ひよて小物く浮
壁石の落て怖く登床の子
緒小指さくお祝指えさる百夜子
一様をおく口に見ると廣ひさ

龜石
龜乐
東我

樹新
柳く
夕キ
吟多橋

玉住

龜石
材居
東我
樹新
谷泉

同 7 江

富士登母をゆて出さるる殿
みのたよりと子も廻る妹
帛紗をひちりもも秘る釜

三 蝶
一 泉
一 瓢

冠 題 新

新糸の猫も四五り襟キ掛
新生姜瓜の子のちてちり小皿
新子たこ糸登の女房も忘る名
新形も虫をさるる娘の言ひ歌

魯 遊
龜 石
鏡 峯
岡 入

同 古

古イ出も店出入り洗濯也
古等極々も蛙の白池の端
古骨買ハ事かぬ俄る
古く人を語る息桶の女丈籠
古ひ緒草紙を母の伸落敷

一 葉
五 来
林 笈
龜 山
木 丸

折込題 入交

藝少入るるおれくの文者
あふれ他人まぢの涼酒

田 張
盃 洗

押入るは松花交代の積干し
水入るふらうと志海りの交り
志んよ入るるも飯子の魚交り
葉入るや何うの吐し新う交り

五字題 惆き

酒吞童子ら金時を極み
江戸の水を流しるきひ
菓子の袋の詩成すくく積

同心みけ

先きの世のひを極み
糸うたると針を糸と新う
風鈴が明存しあがり
吾眠る子おんぬの

尻うり日傘模

折句題 アツサ

雨の籠入梅の墨小酒カ志
新顔のいと云て出はる履札
袴をちよういと新涼の趣あり

夕キ

松花

吟多楼

龜甲

龜乐

園松

二刀

賀重

毒花

柏枝

玉住

関流

三蝶

鳩二

垢摺りよ妻もをさすのさあぬが
唯々大徳と撰者の酒も刻
あつたを妻立たる自をを
いへせくと妻肩も張る二枚の戸

夕キ
松花
栢枝
谷泉

同コフ

腰中若の福くる銭亀
子も祇園會よ禪の中
聲よとるをかくむ砂糖湯
将ぶ約下括太下以二石く猪

龜石
東我
赤老
鉄峯

冠り冠一大

大い發照り初ハ手力雄
大口をきく子小母の苦が笑
大佛のいへまま土石の旋ま花

一泉
龜石
龜石

同西

あ掛の痛を交まはれそ通も温家
あ習へ子志のけり指へ子の供
あ方へ風鏡よあ提子桶

盃洗
二刀
八鬼

折込鉄峯形

坂の勢や地形も望みぬ
市赤花形和しよ筆直者
中形掛ひ内仮りあく飾て出

五字題 身色

勤の銀も高く集って帰る
小サな桶うねを一つんぬ
切を襟りよはを付け
をみドやを六部で出のけ
大ふ菓子茂賣つて喰ふ

村をくすす小様がさす

同の

蔓の跡を吹のぬく涼み
板橋をくまくよりの色
於みちのし煙子を吸付け
丹夜城をくあれく縫ひ
常の通りよ

任をせん

折句題 三ヨキ

一 瓢
田 張
亀 甲

十 籠
五 来
賀 重
福 定
魯 遊

園 入

吟 多 禱
生 蝶
洞 江
龜 山
玉 住

白子紙汚きあはれぬ奇舞ナ子
央進居るま合せの氣も武造り
仕るまう一着用も氣もきき砂
志もは妻四つを早め切替の火

同 三

見る舞よ妻障りよ以の
身もよ七温あ回る三味線
足事清きよ引く赤い持
糸貝まの妙負けぬ老の窟

冠り日

日の落て四糸小窓のほく家机
日もさう梅と出直もこぼし
日切りの袒師へ立花の奥女中
日寧りの母夜帳お丸く肥っ子
日傘子ののめく方一曲る母
日圓りの花ふゆゆり舞る立場
日をもえせく脊寝き魚もあの数
日影々の木田女世留も狭ひ庭

松花
亀樂
梅枝
谷泉

毒方
春窓
田張
三條

東我
鳥月
園入
國香
一瓢
龜甲
浦乐
毒方

日々に夏の名前帳へ江戸回者
日新へ載はる一十世常芥子屋

五来
夕キ

同長

長命寺落葉ハ之の熊子の碑
長短のふく葉も出来て瓢梅
長久寺泊り萩岬も軍書好

龜石
吟多樓
一泉

折込題 冬干

墨の干く 冬干扇と涼しい白
とひちりと 冬干香炉と干きみ猪口

材居
一葉

版を干は日ハ冬干も海深とて

二篇

五字題 疵

手厚い板とがさひたり刺らぬ
花盛りは此刀々 夏とど
美しは葉碗づくし け
夏最命がたむむとど

生蝶
龜山
ハ鬼
十瓶

同上分別

路銀もは之ぬ本宿をり
左ノ禱をすひり切り上

盃洗
賀重

昂席よりお滝らへ仕よ
物くど是を糸糸履て洗ひ
油干はれよ
二 柏枝 刀

かりど 糸糸履
折勺冠 カキハ
玉住

借ふ来りちよと仕掛をちよ子
浦糸

羊もハッ乳ぐ呑るる流り子
来笑

駕籠も飛せり是弱の鼻括括
三よし

物おを干はれふと初音履
五糸

壁一を壁紙治り楯よ杖教く
三蝶

傘で楯をちよ子功者に早イ母
一泉

肝の立ッ調子の履み撥汗
盃洗

同 二 三

仕舞洗ひよ舞も楯めり
亀甲

仕舞着よ利イ多綿本
園松

仕舞する子の鏡臺も鏡
梅枝

仕掛けを従く白地中取
賢止

志すむ端よ糸もたるる
一瓢

冠り冠 竹

舟村の折り小ぬ海に巻封ド
舟の根も砂地をまよはのまや
舟返すまゝ指と返ぬまゝ喜し

亀石
八鬼
寛坊

同言

言イ調子も七奉この横州

一玉

言イ調子も冠のふる修心腰

松花

言崎の月利手も出舟を白州紙

十籠

言禱も川ヶ鼻紙を持添ふ手

罔入

言聖禁も折ちし駕の毫の特

雪嵩

折込冠 天吹

獲ち子い天琴絨の笛袋

賀産

葉を吹く吞まひ子天と落して

鳥月

葉を吹く妻も天も利の棚

龜山

五字歌 我のち

柱まの付る古鼓り算之

夕キ

引込の思葉をを敷えん之

東我

輪毫の飯りの口が明い

一葉

蜜柑剥く 影子の女 服向て
又ほおばひ大系衣の暖屋づく
身震ひを抱へ片も小のける 胎

吟多樓
夢中
在言

同 ヲハシ

妻の出は針策故衣を仕舞ふ夜
終もさひんう 足せぬ妻自慢の子
妻世るも 獨打て急ぐ 芝居の玉
ハ多相の咄 一頁はよ言ふ婦
妻のあつた 相織教文く 知ら道

賢止
國松
梅枝
谷泉
牛斗

詠しん子母の持病を疾みく
妻何この果るる 教よ忍ひ物
和らうも子母へ 土産心 熟し柿
妻世るも 是ぬ合相も 芝居の司
壺のさゝん 著縁チ 折く 紫藤麴

田張
鉄峯
三昧
旭二
盃洗

同 ヲキセ

子の顔イお 孫ハ三ツ足
おろろく 孫子 狭ひ切備
小判を背負う 中尾の亀

寛坊
美園
蒲乐

子持子風呂の巻くを儀り
河多々んくも多々きく巻
子を子枕よ気を正し
小春遠出よ気もさあ

冠り玉

玉壺の見え巻あひ言語
玉の簪一巻五ふりすみ形
玉のほくは葉よ魚の巻あ巻

二刀
之は
松月
龜石

一玉
毒草
松花

同

立ッ桶の美初り上げ小瓶よ座
立禱よ時日挿指も二寸さ
立うる袖を下川ゆらきさ
立ちあふ喝むは付草花飾り
立り通るたのよ一程よ海あり子

折込題 重敷

以美の多ひお家小亭の春
座あ美歳ッ亭の海文々
人あよあく御殿へ入る重

一瓢
一亀甲
一本鳥
拍枝
蒲床

一泉
十瓶
賀重

五字冠 虫のい

水より海へ移る川通へ飛込
月或方へふのち猪之世出て
道々の掛りぬまをのぞみ

同 訓子

柿を剥く戸柳へ仕舞
猪の手に書く赤の香せ
橋名をす航柱を福
袖の下をぬいぬい

同 仕合

朧の腹へ捲くを突つ立
本玉よ磨ひくきこれ
船を漕ぐ極へ縁の付き
塗る板づく小碇がかく
踊り出さる成りぬきの所

身より遠く遊る小舟
猪の尻小刻る池を渡る魚

ハ鬼
龜山
生蝶

一葉
来賀
龜樂
福定

圓入
夕キ
春窓
洞江
材居

玉住

〃

琴の亦るるは消へる秋の故
 玉のくは深き亭をきくももあき
 立場葉や大はたの雑魚のあつ汁
 月小肌をきくまゝのむらさ
 虫のく向ふをきくテ小舟を呼ひ
 細子 買ひてあそぶと暮るを待たせ
 仕合 風呂あぬ包のこ子借お持させ
 " " " " " " "

かゝる夜二の扁終

後篇追く出板

